

持続可能な社会が見えてきた！

世界中で親しまれているイソップ物語。その教訓は決して古びることはありません。「ウサギとカメ」の、「どんなにウサギの足が速くても、努力を怠ると鈍足のカメにも追い抜かれてしまう」というお話は、紀元前の昔から親から子へと語り継がれてきました。

今号の新日本財経では、2つの特集を組みました。「日本の先端技術」と「食の安全はこうして守る」です。

「日本の先端技術」は、自動車とエレクトロニクスの最新技術を取り上げました。昨年秋の「TOKYO MOTOR SHOW」では、ハイブリッドカーや電気自動車など、環境に優しいクルマが人気を集めました。ハイブリッドカーが登場したのは、1997年12月のことです。以後10年間で200万台近くのハイブリッドカーが販売されたと思われます。

現在、自動車産業の環境技術は、日本が世界をリードしています。しかし、90年代後半まで、日本の合言葉は欧米に「追いつけ、追い越せ」でした。それが逆転したのは、イソップ物語のカメのように、不断の努力を惜しまなかったからにほかなりません。

一方、「食の安全」は人間の生存権にかかわる問題です。残念ながら、「チャイナ・フリー」が流行語になるほど、中国食品に対する不信感が世界中に広まりました。誤った報道が多かったにしろ、失った信頼を取り戻すことは容易なことではありません。

日本でも食の安全を揺るがす問題はいくつもありました。いや、いまでも絶えることがありません。しかし、失敗を教訓に直った企業があります。失敗が起きないように、中国企業と一体となって、失敗の芽を摘み取っている企業があります。こうした努力は高く評価されてよいはずで

今号の特集で2つのことが明らかになりました。経済成長と環境保全は両立すること。食の安全を担保することは利益につながることで

持続可能な社会を創り出すことは、決して難しいことではありません。カメのように歩みが遅くても努力を惜しまないこと。私たちはイソップの寓話のように、そのことを代々伝えていく必要があるようです。

新日本財経 編集部 林 慎

